

『ドン・キホーテ』の本

評者 坂東 省次

松本幸四郎主演のミュージカル『ラ・マンチャの男』は通算千回をこすロングランを記録している。『ラ・マンチャの男』では、卒に入られた詩人セルバンテスが即興で演じる郷土と、彼の妄想の中に生きる騎士ドン・キホーテの遍歴の物語が劇中劇として展開する。

美智子皇后陛下が去る6月に『ラ・マンチャの男』を観劇されたという。公演後の皇后陛下との歓談のひと時、松本幸四郎氏は「イギリスのように日本にも、皇后陛下のお力で、王立劇場を作って下さい」と希望を述べられたところ、皇后陛下には「それでは私もドン・キホーテにならなければ駄目ね」と仰せられたとか。

ドン・キホーテとは、1605年に小説家ミゲル・デ・セルバンテス(1549 - 1619)が世に送った名作『ドン・キホーテ』の主人公のことである。ここからドン・キホーテ的な人間の型が生まれた。大辞林はこう説明している。「ツルゲーネフが規定した人間の二つの型の一。ハムレットの思索型に対して行動型。理想主義的で情熱家のタイプ」とある。朝永三十郎はその著『ドン・キホーテ式とハムレット式』(大日本図書、1906)のなかで、日本人はドン・キホーテ型の人間であったが、西洋の「飛び火」でハムレット型の人間になったという。

『ドン・キホーテ』が日本に上陸するのはいつだろうか。『ドン・キホーテ』に言及している最古の資料は慶応時代に遡るが、翻訳として登場するのは明治時代のことである。明治20年、完訳ではなく部分訳として刊行されている。渡辺修二郎訳編『純喜翁奇行傳』(教育雑誌)がそれである。完訳は大正4年のこと、島村抱月・井上伸共訳『ドン・キホーテ』(上・下、植竹書院)である。しかしいずれも原典からではなく他言語からの重訳であった。

原典からの翻訳はというと昭和に入ってからのものであり、これまで3種類ある。最初の完訳は、会田由訳の『才智あふるる郷土ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ』(前・後篇、筑摩書房、1960 - 62)である。次に永田寛定・高橋正武共訳『ドン・キホーテ』(正・続編6分冊、岩波文庫)がある。これは刊行開始こそ1948年と早かったが、最終的に完了したのは1977年であった。そして、最後に牛島信明訳『新訳ドン・キホーテ』(前・後編、岩波書店、1999年)である。

朗報がある。今年刊行400年を記念して『ドン・キホーテの食卓』の著者で知られる荻内勝之氏が間もなく日本で4番目の完訳『ドン・キホーテ』を出される。では、学生の皆さんにはこれら4種類の『ドン・キホーテ』の内どれをお勧めすればよいだろうか。最新刊の荻内訳を校正ゲラで読む機会があったが、学生には読みにくい古い文体を使っている。したがって、お勧めとなると、やはり牛島訳『新訳ドン・キホーテ』となる。ただ、『ドン・キホーテ』は長編小説であり、最初からこれを読むのは大変である。その前に同じ牛島編訳の岩波少年少女文庫『ドン・キホーテ』を読むのもいいのではないかと思う。また、今年は『ドン・キホーテ』刊行400年を記念して、少年少女向け翻案『ぼくのドン・キホーテ』(行路社)の刊行が秋に予定されている。これもまた、推薦できよう。

それにしても、嬉しいニュースがある。イスパニア語学科では11月10日から15日まで、国際交流会館6階ユニバーシティギャラリーで「『ドン・キホーテ』刊行400年記念展示会」を開催して、明治から現代までの翻訳・翻案『ドン・キホーテ』を展示する予定であるが、それより少し前の11月初旬の文化祭で、イベロアメリカ研究会がドン・キホーテをテーマにした展示会を企画しているという。今から楽しみである。

ばんどう しょうじ(教授・スペイン語学)